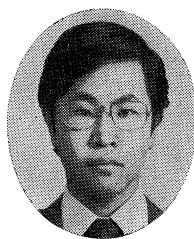


オラホのセンセエ

隨想



渡辺晋一

（中略）

三月二十六日、原町合同庁舎で辞令の交付を受けた。勤務校は双葉郡川内村立川内第一小学校であった。四月だとうに職員室には、まだストーブが入っていた。この土地で最初に出会った子供に、「オラホノセンセエ?」とフイに尋ねられた。その子は五年生だった。私が、教室の入り口に立つた時、男の子二十四人、女の子九人の目が私に集中した。「ホラミロ、ヤッパリ、オラホノセンセイダ!!」この時、なんとかこの子たちの期待に応えねばと思った。

川内村は福島県の浜通り中部、阿武隈山地のほぼ中央部に位置している。人口が四千ほどの山村である。この村の山は、五十五年の年末に降った大雪で育ち盛りの杉の木が折られるなどの

大きな被害を被ってしまった。四月末になつても山間には、まだその雪が残っていた。大学は、まさしく学生生活最後を飾る楽園であったが、立場を変え、今、その現場に立つた時、デューアイもペスタロツチも一瞬のうちに消しとんでしまった。

その最初の精神的ショックは、現場教育の場においてであった。本校は、教育目標の具現化を図るために、三年も前から、文章を正しく読みとらせるためには、どう指導すればよいか、という国語力をねらった指導を研究主題として取り組んでいた。このことについて、私はなんの研究もしていかなかった。加えて、私が採用になったこの年は、新教育課程が完全実施となつて

二年目を迎えていたのだった。現場の厳しさをここであらためて痛感させられた。二つ目は、四月末から実施した家庭訪問でのことであった。「現代の子供は、思い通り行かなかつたりすると、すぐにカッとなつてしまふ子供が多くなつてしまつてゐるようだが、自分の感情を抑制しコントロールできる子供、自分の意見が通らなかつた時には、しばらく我慢して時機を待ち自分の意見を練り直すことのできる、そんな柔軟な心を持つた子供を育ててゆきたい」とか、また、「やる気について神経生理学者はこんなことを言つてゐる」と、しかつめらしく話したのであった。

本来なら家庭訪問といふのは、教師が聞き役に回り、学校では聞き出せない地域のことや子供のことについて知り、更に子供の理解を深めるべき機会であるはずなのに、堅苦しい話をしても子供を理解する大事な機会を失つてしまつたのであつた。しまつたと、思つてゐる時に、茶うけに差し出された糞山葵の漬物は、涙が出るほど辛かつたのを思い出す。

この時、の腑甲斐無さに落胆させられたのである。

本校は、全校児童が百八十九人といふべき地校である。どんな行事をするにも全員で取り組み、みんながみんな責任のある役割について仕事をしてい

二年目を迎えていたのだった。現場の厳しさをここであらためて痛感させられた。

二つ目は、四月末から実施した家庭訪問でのことであった。「現代の子供は、思い通り行かなかつたりすると、すぐにカッとなつてしまふ子供が多くなつてしまつてゐるようだが、自分の感情を抑制しコントロールできる子供、自分の意見が通らなかつた時には、しばらく我慢して時機を待ち自分の意見を練り直すことのできる、そんな柔軟な心を持つた子供を育ててゆきたい」とか、また、「やる気について神経生理学者はこんなことを言つてゐる」と、しかつめらしく話したのであった。

今回の新学習指導要領の改訂の柱となつた、「人間性豊かな児童生徒の育成」、「ゆとりある、しかも充実した学校生活」、「国民として必要とされる基礎的、基本的な内容を重視する」とも、児童生徒の個性や能力に応じた教育が行われるようにすること」なども、とりもなおさず小規模校で小学校のこの学校でこそできるものではないのかと、あらためて感じさせられたのである。

ここは確かに、自然条件や生活条件、社会的条件が厳しいところであるが、ここには、これらの条件を克服できるだけのものがある。ここには素朴な文化と伝統がいきづいており、自然から多くのことを学ぶことができる。そのうえ、心と心とのふれ合いがある。そしてなによりもまして、子供たちがたくましいのである。

二年目こそは、もつとしっかりと土地で子供たちの信頼を得て、目を見開き、視点を一層高くして、教育の諸問題と取り組んでゆきたい。

（川内村立川内第一小学校教諭）